秘蜜サークル

昼下がりの淫らな人妻たち

天草白
挿絵／岬ゆきひろ

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION

Contents

目次

第1章　憧れの先輩と秘蜜の初体験……4
第2章　セレブ夫人に婚外のときめきを……53
第3章　昼下がりの淫らな人妻モデル……93
第4章　二度目の情事は恋慕とともに……132
第5章　清純教師に身も心も悦びを……163
第6章　四人の人妻が捧げる柔尻……203
エピローグ　秘蜜サークルはこれからも……253

登場人物 *Characters*

川野 良太
（かわの りょうた）

大学三年生の童貞青年。二十歳。高校時代に生徒会に入っており、会長だった千夏に憧れていた。その千夏に誘われテニスを始めることに。根は純情だが性欲は人一倍強い。

原田 千夏
（はらだ ちなつ）

良太の先輩である二十二歳の若妻。快活でサバサバした性格。大学時代はテニスサークル所属で、卒業後も社会人サークルに所属。茶髪のポニーテールでグラマラス体形の巨乳。

神崎 秋穂
（かんざき あきほ）

二十五歳の社長夫人。千夏の大学時代の三つ上の先輩。一回り以上年上の夫は性に淡白で、成熟した体を持て余している。黒髪ロングヘアのおっとり美人。ぽっちゃり体形。

山瀬 春菜
（やませ はるな）

三十歳の子持ち人妻。千夏や秋穂の在学時にサークルに遊びに来ていたＯＧ。主婦向けの雑誌で読者モデルをしている肉食系美人。茶髪のセミロング、モデル体形で爆乳。

新藤 真冬
（しんどう まふゆ）

二十四歳の新妻女教師。千夏の大学時代の二つ上の先輩。貞操観念が強い真面目な性格で性的なことを忌避しがち。黒髪ショートヘアのクール美人。長身でスレンダー体形の美乳。

第1章　憧れの先輩と秘蜜の初体験

（千夏先輩、やっぱりカッコいいな。高校時代のままだ）

川野良太は感嘆の思いで、眼前のクレイコートで繰り広げられるラリーの応酬を見つめていた。

今日はこのテニスサークル『サーティラブ』に入って初めての練習だ。

今年で大学三年生になった彼がサークルに入ったきっかけは、高校時代の先輩からの誘いだった。

その先輩――コート上を華麗に駆ける一人の女性は、先ほどから彼の目を一身に引きつけていた。

午後の陽光の下、ラケットを振り抜くたびに、ポニーテールにまとめた茶髪が軽やかに弾む。

快活な美貌はわずかに上気し、唇を艶めかしく開きながら熱い息を吐き出す。

白いテニスウェアを内側からぱつんぱつんに押し上げる胸元や腰回りは、ため息が漏れるほどグラマラスだった。

（す、すごい、おっぱいが揺れまくってるよ、千夏先輩）
彼女――原田（はらだ）千夏の巨乳ぶりは高校時代から五年近い歳月を経て、ますます磨きがかかっているようだ。
今もパッシングショットを放った拍子に、こんもりと盛り上がった胸元が勢いよく上下に弾んでいた。
重量感たっぷりに揺れる双丘は、まるで実った二つの果実を胸の中に仕込んでいるかのよう。
しかも、それが千夏の軽やかな動きに合わせて、たぷんたぷんと間断なく揺れ弾むのだ。
思わず見とれてしまうのと同時に、若いペニスは眼前の刺激に素直に反応し、膨張を始める。
（だ、駄目だ駄目だ。こんなところで勃たせちゃ）
周囲の目を気にして、反射的に前屈みになった。
が、彼女に見とれているのは良太だけではない。
「うわぁ、相変わらず巨乳だな、原田さんって」
「見たか、今の。胸元の揺れが半端じゃないぞ」

「おまけに人妻の色気ムンムンって感じでたまんねぇ」
他のメンバーも軒並み下卑た感想をひそかに漏らしながら、千夏の姿を注視しているようだった。
滑らかな首筋や胸元に垣間見える鎖骨、ダイナミックな乳揺れ、そしてハーフパンツの下から覗くスラリと長く形のよい脚に――。
（もう一度、こんな風に千夏先輩と一緒にいられるなんて）
感慨に耽る。
高校時代の千夏は、良太にとって一方的に憧れるだけの存在だった。
一言で言えば高嶺の花。
当時、生徒会長を務めていた三年生の彼女目当てで、新入生だった良太は書記として生徒会に入った。
そして生徒会で一年間一緒だったのだが、恋愛に初心だった彼に積極的なアプローチなどできるはずがない。
当然、彼女との仲が特に進展するわけでもなく、もちろん告白などできるわけもなく――。
良太の淡い憧れは憧れのまま終わったのだった。

現在は、かろうじて卒業後もメールのやり取りを続けている程度の仲だ。
その初恋を引きずっているせいで、今も良太は彼女いない歴イコール年齢という記録を更新し続けている。
無論、大学やアルバイト先などでも同年代の女性と出会うことは出会うが、どうしても千夏と比べてしまい、恋心を抱くことができないのだった。
（しかも千夏先輩、今はもう人妻だし。俺なんかが割って入る余地ないよな）
千夏は一年前、大学卒業と同時に結婚している。それによって良太の淡い初恋はあっけなく終わりを告げた。
彼女が結婚したことを知らされた日は、朝方まで大学の友人を相手に愚痴り、悲嘆に暮れたものだ。
そんな彼女からテニスサークルに入らないかと誘われたのが三日前のこと。
そこは千夏が大学時代に入っていたテニスサークルのＯＢやＯＧを中心にして、その知人なども参加しているサークルだった。
（まさか、千夏先輩、本当は俺のことが気になっていて、それでサークルに誘ったとか……いやいや、そんな上手い展開はないよな）
思わず妄想に逃げ込みそうになる。

彼女が結婚したのはもう一年も前だというのに、未だに失恋のショックから立ち直れずにいた。
「ねえ、良太くん、このあと時間ある？」
「あ、はい、大丈夫です」
突然の問いかけに反射的に答えながら、なおも思索にふける。
生徒会で一緒に働いた一年間は夢のようだった。学園のアイドルというべき千夏のすぐ傍で過ごせたのだ。
「ちょっと相談したいことがあるんだけど」
「そうそう、こんなうまい展開があるわけ……って、ええっ？」
妄想に浸っているうちに、いつの間にか試合は終わっていたらしい。先ほど話しかけてきたのは、当の千夏本人だったのだ。
そのことに気づき、良太は泡を食って意識を現実に戻す。
千夏は良太の傍でたたずみ、悪戯っぽい笑みを浮かべていた。
「何よ、私が相手じゃ不満？」
「ふ、不満なんて！」
むしろ望むところだった。

「じゃあ、練習が終わったら出口で待ってて。再会を祝して、一緒に飲みましょ？」
にっこりと微笑む千夏に、良太はポーッとなって見とれたのだった。

千夏に案内されたのは、練習場からほど近い場所にある居酒屋だった。
彼女がサークルの友人たちと時々飲みに来る、行きつけの店なのだという。
お勧めするだけあって料理はどれも美味で、しかも値段が良心的だ。賑やかな喧騒に包まれた店内で、良太と彼女は隣り合って座っていた。
ポニーテールにした茶髪の先端が時折、二の腕辺りに触れ、それだけで肌が粟立つほどドギマギしてしまう。
（うう、緊張しちゃ駄目だ、俺）
内心で自分自身を叱咤するものの、速まる胸の鼓動を抑えることができなかった。
恋愛に初心な彼にとっては、この距離感だけで心臓が痛くなるほどのときめきを覚えてしまうのだ。
「それにしても良太くんとこうしてお酒を飲むなんてね」
「お、俺だってもう二十歳ですから。大人ですっ」
憧れの千夏の前で少しでも背伸びしたくて、良太はそう言い放った。

「そっか、大人かー。生徒会にいたときは弟みたいな感じだったのにな」
千夏が昔を懐かしむように目を細めた。
「ち、千夏先輩、相談したいことって？」
ますます慌てた良太は背中に汗を滲ませながら話題を変えた。
せっかくの再会だというのに醜態を晒すわけにはいかない。必死だった。
「実は夫のことなんだけど」
千夏が良太のことをジッと見つめる。
切れ長の瞳は潤んだように濡れ、揺れていた。
一瞬、捨てられた子犬のような寂しげな表情がその瞳に浮かぶ。
「んー……やっぱりなんでもない。ごめんね」
何か言いかけた千夏は、すぐに頭を左右に振った。
「先輩……？」
「せっかく良太くんと初めて飲みに来たんだし、こういう話はまた今度でいいかな」
先ほど彼女が浮かべた表情が引っかかった。
何か悩みでも抱えているような態度だ。
「先輩、俺でよかったら何でも相談して――」

言いかけたそのとき、ちょうど店員が中ジョッキのビールを二人分運んできた。
「ありがとう、良太くん。でも本当にいいの。それよりも今日は飲みましょ。再会を祝して。ね？」
これ以上、立ち入ったことを聞かないほうが良さそうな雰囲気だった。
「は、はい、じゃあ……乾杯」
千夏と軽くグラスを合わせ、ジョッキに口をつける。
口の中に広がる麦の苦みに軽く顔をしかめた。
大学生になってから覚えたアルコールの味だが、未だに美味さよりも苦さを感じてしまうのは、やはり大人になりきれていないのだろうか。
もちろん、千夏に「大人です」と言い張った手前、そんな素振りを見せるわけにはいかないが。
（うわぁ。千夏先輩、色っぽいな）
隣に横目を走らせ、ひそかに嘆声を漏らした。
「ふうっ」
軽い嘆声混じりにビールのジョッキを美味しそうに傾ける千夏は、練習のときに見た姿よりもはるかに艶めいていた。

「何よ、じろじろ見て」
「あ、すみません……つい」
「そういえば、生徒会でも私のこと、よく見てたよね？」
いきなりの指摘に心臓の鼓動が跳ね上がった。
あのころ、良太の想いは千夏に見透かされていたのだろうか。
「もしかして……私目当てで生徒会に入ったの？」
「そ、そんなことっ」
ますますギクリとして、良太はそれを誤魔化すようにジョッキの中ほどまで一気に飲み進める。
頭にぼんやりと靄がかかっていくようなほろ酔い気分だった。
「なーんて、ね。冗談よ、冗談。良太くん、私みたいな女はタイプじゃないでしょ」
「そ、そんなことないですっ。俺、千夏先輩のことをずっと――」
思わず本心を吐露しそうになって、良太は慌てて口をつぐんだ。やはり酔いが回っているのかもしれない。
「……本当？」
短い沈黙のあと、憧れの先輩はジッと良太を見つめた。

「あ、えっと……」
千夏もまた酔いが回ってきたのか、頬はほんのりピンクに上気し、わずかに開かれた朱唇からは時折悩ましげな吐息が漏れる。
気持ちを落ち着かせるようにポニーテールをかき上げた左手の薬指には、銀色の指輪が光っていた。
（結婚してるんだよな、千夏先輩……旦那さんが羨ましい）
人妻の証を目にして、あらためて胸がズキンと痛む。
反射的に指輪から目を逸らすと、今度は抜けるように白い首筋や鎖骨、さらに胸元までが視界に入った。
ブラウスの胸元をこんもりと盛り上げる膨らみ。女らしくくびれたカーブを描く腰。そしてむっちりと肉づき豊かな双尻。高校時代に比べても一段と凹凸のある扇情的な体つきになったように思える。
昼間の練習でも散々注視していたグラマラスボディを見ていると、ムラムラとした欲情がみぞおちの下を突き上げてきた。
（あ、やばい……！）
海綿体に熱い血流が集まってくる。

若いペニスはみるみるうちに勃起し、硬いジーンズの生地を内側から元気よく押し上げてきた。
ただでさえ、周囲は彼女持ちが多く、二十歳になる今まで交際経験すらない彼は毎日のように悶々としている。
そこに、高校時代からの憧れの女性であり、人妻になったことでますます色香を増した千夏を目にしたのだ。
童貞ならではの旺盛な性欲を制御できるはずもなかった。
（勃ってるのがバレちゃう。まずいよ、これっ）
良太は慌てて上体を前屈み気味にして、勃起を誤魔化した。
そんな彼を、小首を傾げるようにして見つめる千夏。
「んー、なんか良太くん、エッチな目になってるぞ？」
切れ長の瞳に浮かぶ妖しい光にドキンとなった。
「若いもんね。彼女もいないんじゃ、それ苦しいでしょ」
千夏が良太の股間に悪戯っぽく視線を向けた。
すでにそこは海綿体の充血によって痛いほど勃起し、内側からズボンの生地を猛々しく押し上げてテントを形作っている。

「す、すみません、俺……」
ばつが悪い気持ちで良太は股間を両手で覆った。
「あはは、ごめんごめん。からかいすぎたね」
そんな彼に千夏はにっこりと微笑みかけた。
「ねえ、解消させてあげよっか。私を見て、そんな風になってくれたんだよね？」
「えっ、解消って――」
慈愛に満ちた視線に、笑みに、ドキンとして振り返る。
「そういうところ、高校時代から変わらないわね。全部言わなきゃ分からない？　あんまり鈍いと女の子に嫌われちゃうぞ？」
憧れの先輩はからかうように笑いながら、薄ピンクに上気した顔を真っ直ぐに向けていた。
綺麗なアーモンド形の瞳に宿る光は、冗談めかした言葉とは裏腹に真剣だった。
（もしかして千夏先輩、俺を誘ってる？）
良太は心臓が爆発しそうなほどドギマギしつつも、なお半信半疑だ。
酔った勢いでこんなことを言っているのか、あるいは――。
潤んだ瞳に吸い寄せられるように、良太は大きくうなずいていた。

（まさか、あの千夏先輩とラブホに来ちゃうなんて――）
夢のような展開に、良太は呆然となったままだった。
もちろんラブホテルに来たのは生まれて初めてだ。
薄暗い照明や自宅よりもはるかに広々としたベッドが、期待と緊張の入り混じったゾクゾクとした感覚を呼び起こす。
先ほどから胸の芯がひっきりなしに疼いていた。なんとも落ち着かない気分で四肢がそわそわと震えている。
「どうしたの、良太くん。なんだかソワソワしてるわよ？　もしかして、こういうところに来たのは初めて？」
そんな良太を見て、千夏がくすりと笑った。
かぐわしい香りが漂ってくることに気づく。
二人っきりの上に至近距離のせいか、サークルや飲み屋よりも彼女から漂う香りを濃密に感じ取れるのだ。
（千夏先輩、すごくいい匂いがする）
鼻腔をくすぐるその香りに、良太の胸は甘酸っぱくときめいた。ますます心臓の鼓

動が速まり、胸の中心部に痛みを覚えるほどだ。
「あ、いやそもそも女の人とそういうことするのが……」
「えっ、良太くん、経験ないの？」
千夏は驚いたように切れ長の瞳を見開いた。
「え、ええ、まあ……」
彼女の反応にあらためて恥ずかしさが込み上げる。
同時に湧き上がる悔恨。
つい童貞だということをカミングアウトしてしまったが、もしかしたら引かれてしまっただろうか。
「私が初めての相手でいいの？　誘っておいて言うのもなんだけど……私、人妻だよ？」
が、千夏は引いたり、馬鹿にした様子は見せず、むしろすまなさそうに顔を伏せた。
「は、はい、千夏先輩が相手なら、俺っ……」
良太は何度も首を上下に振った。
頬から耳の付け根までが恥ずかしさで火を噴くような感じだ。
「あら」

千夏はわずかに笑みを深くした。嬉しげにアーモンド形の目を細め、良太に慈しむような視線を送ってくれる。
「そう言ってくれると嬉しいな。じゃあ私が手ほどきしてあげるね」
（先輩が、手ほどき……？）
考えただけで全身に甘美な疼きが走り抜けた。
憧れの女性のリードで初めてのセックスを経験する――男にとっては最も理想的ともいえる初体験のシチュエーションだろう。
「あ、その前に――ちょっと待ってて。私、準備してくるから」
「準備？」
首を傾げた良太には応えず、千夏はバスルームに引っこんでしまう。
良太はドキドキしながら、彼女が出てくるのを待った。
しゅるり、しゅるり、とわずかに衣擦れの音が聞こえてくる。
（千夏先輩、何してるんだろう）
ますます興味が募り、バスルームを覗きたい衝動が込み上げた。
だが『待っていて』と言われた以上、それを破ることなどできない。
良太は湧き上がる好奇心と淫心を理性を総動員して抑え、ひたすらに待った。

実際に待ったのは二、三分だったはずだが、まるで三十分にも一時間にも感じられる。

やがて、しばらくして出てきた彼女は、私服から別の服装に着替えていた。

「先輩、その格好は……！」

良太は驚きに息を呑む。

千夏が身に着けているのは純白のテニスウェアだ。

「ふふ、今日の練習で私のことジッと見てたでしょ？　こういう格好、好きなのかな、って思って」

ファッションモデルさながら、千夏は軽やかなテニスウェア姿のまま、その場でくるりと回ってみせた。

ボタンが外されて大きく開いた胸元で、深い谷間もあらわな双丘が勢いよく揺れる。胸丘の頂点で先端の尖りが浮き出ているのは、おそらくブラジャーを着けていないからだろう。

ハーフパンツに包まれたむっちりとした腰回りは肉感豊かで、人妻の色香をふんだんに放っている。

形のよい稜線を描くふくらはぎは、健康的な美しさと艶めかしさを絶妙なバランス

で兼ね備えていた。
「せっかくの初体験だし、良太くんの好きな格好でさせてあげるね」
良太は反射的に身を乗り出して、ごくりと喉を鳴らす。
今日の練習でも目を奪われた魅惑的なテニスウェア姿がフラッシュバックして目の前の彼女と重なり、背筋をぞわりと粟立たせた。
「嬉しいです、俺」
「喜んでくれて私も嬉しいな。そういう素直なところ——高校時代から変わってないのね」
今からこの格好の彼女とエッチするのだと思うと、興奮のボルテージが一気に上がった。
夢見心地で千夏に視線を向けていると、不意にたおやかな手がズボンの股間部に伸びてきた。
「う、あっ」
良太は下半身をビクンと震わせた。
手のひらで軽くさすられただけで、股間を鮮烈な電流で貫かれる。
「あ、敏感だね。初々しい反応してくれて嬉しいな」

千夏は口の端を笑みの形に吊り上げ、手のひらに力を込めた。ズボン越しに感じる圧力が強まり、肉棒全体に甘美な圧迫がかかる。
「ここが気持ちいいんでしょ、良太くん？」
千夏の手のひらが圧迫を強め、腰の芯にジンとした快い痺れが走った。
まるで男の性感を知り尽くしたような絶妙の力加減と巧みなさすり方だ。
「はぁぁっ、あうっ……せ、先輩……」
憧れの女性に手のひらだけで性器をいたぶられている感じが、良太の被虐感を刺激した。
童貞のペニスはトランクスの中でみるみるうちに海綿体への充血を増し、フル勃起サイズへと膨張する。
「今度は直接触ってあげるね」
千夏は屈みこむと、上目遣いに良太を見上げながら、ゆっくり焦らすようにジッパーを下ろしていった。
トランクスを内側から突き破りそうな勢いで勃起していた器官を右手でつまみ、ジッパーの隙間から引っ張り出す。
「ふふ、真面目な顔して立派なモノを持ってるじゃない。こんなに大きいの、初めて

見たかも」
手慣れた仕草は、そのまま彼女の性経験値の高さを示していた。
（千夏先輩、今までどんな男と――）
胸の奥がざわついた。
これほど美人なのだから、引く手あまたに違いない。夫以外にも、何人もの男に言い寄られ、性体験を積み重ねてきたのではないだろうか。
実際、高校時代も校内外を問わず、彼女に憧れる男は数えきれないくらいいた。
もちろん良太もその一人なのだが――。
相手は人妻なのだし、彼の恋人でもなんでもないのだから、嫉妬などお門違いだ。
頭では分かっていても、やはり胸の奥から湧き上がるのは、悔しさとも焦燥ともつかない気持ちだ。
「あら、まだ大きくなるのね。本当にたくましくて素敵よ、良太くん」
千夏は露出したペニスを見つめ、軽く吐息を漏らした。
「今まで童貞だったのが惜しいくらい。これはどんどん使わないと勿体ないわね」
好奇と欲情の入り混じった視線がねっとりと肉棒に注がれているのを感じた。
憧れの千夏先輩に性器を間近で見られている――込み上げる羞恥で全身にじわりと

汗が滲んだ。
が、同時に、その恥ずかしさが妖しい興奮となって背筋にゾクゾクとした甘酸っぱい痺れを生じさせる。
「じゃあ、さっそく味見させてもらうね」
言うなり、千夏が顔を寄せてきた。
（ああ、千夏先輩が俺のチンポを咥えようとしてる――）
良太は半ば呆然としながら夢のような情景を見下ろした。
あと五十センチ。
甘ったるい吐息が亀頭に吹きかかる。
あと三十センチ。
艶めいた光沢を放つ唇が今にも触れんばかりに接近する。
あと十センチ――。
待ちきれないとばかりに、股間のペニスがびくびくと脈動する。
先端部からはすでに大量の先走り液が漏れ、亀頭全体をヌラヌラと濡らしていた。
「ふふ、早くフェラチオしてほしいんでしょ？　たまらないって顔してる」
千夏は良太を焦らそうというのか、わざとゆっくり顔を近づけ、なかなかペニスを

呟えようとしない。
「うう、千夏先輩……」
良太の声は興奮でカラカラに掠れていた。
（ああっ、早く……！）
高まる期待と増大するもどかしさで下腹部を何度も揺らした。心臓の鼓動が高まって胸が痛いほどだ。
「ふあ、ぁっ……！」
熱く柔らかな感触が亀頭に触れた瞬間、良太は喉を震わせて呻いた。
（あの千夏先輩が俺のチンポに口で触れている――）
高校時代、幾度妄想したか分からないシチュエーションが今、現実のものとなって自分の身に訪れている。
「ああ、うくぅっ、千夏先輩っ……！」
感動で胸が熱くなった。
同時に、生まれて初めて味わう性器へのキスで、良太の肉茎に妖しい愉悦がじわじわと広がっていく。
鼻先から漏れる吐息が亀頭の表面を撫で、ペニスの芯にぞわぞわと甘痒い肉悦が走

り抜ける。
「良太くんのオチンチン、すごく熱くなってる……」
千夏は亀頭を軽く咥えたまま、上目遣いで良太を見上げた。切れ長の瞳が笑みの形にカーブを描く。
「どう、気持ちいい？」
どこか挑発的な視線で語りかけられた。
「は、はい、すごく……」
良太は喉がからからに渇いているのを意識しながら、かろうじてそれだけの言葉を発する。
「ふふ、本当に気持ちいいのは……これからよ」
ペニスを頬張りながら千夏が笑みを漏らした。
唾液でぬめる温かな口内に少しずつペニスが飲みこまれる。
「う、ぐうぅぅっ……！」
先端から付け根に向かって熱く濡れた感触が広がっていき、ぱんぱんに張り詰めた肉棒が狭い口内でびくんと跳ねた。
まるで湯たんぽの中にでも浸しているような熱さと湿潤感は、全身に鳥肌が立つほ

ど心地よい。
うねうねと動く口腔粘膜による緩慢な摩擦感で、亀頭にキスされたときよりもはるかに鮮烈な愉悦が肉棒全体にくまなく広がっていった。
「く、あああっ……！」
根元まですべて飲みこんでしまうと、すかさず千夏は顔を上下に振り始めた。ヌルヌルの唾液を男根にまぶし、ぬりつけるような動きだ。
口腔内で肉棒が徐々にスピードアップしながら抜き差しされて、本格的なフェラチオが開始される。
「こ、これがフェラチオ……！」
人生で初めて味わう性器への口唇愛撫だった。
他人の口の中で肉棒を愛撫されるのは、自分の手で扱くのとはまるで違う感触だ。何よりも女性を足元に傅かせ、奉仕させているというビジュアルが、男としての征服感を甘美に刺激してくれる。
頬を窄めて肉棒を口内で扱く千夏の顔はひょっとこのお面を連想させた。
（千夏先輩のフェラ顔、めちゃくちゃエロい！）
怜悧な美貌とのギャップが妖しい色香を醸し出していた。温かな口腔内で肉棒がさ

らにワンサイズ膨れ上がる。
「ん、飲みこみ、きれな……」
さすがの千夏も目を白黒させて喘いだ。
それでも熱い舌肉を亀頭に巻きつけ、なおも口唇奉仕を続行するあたりはさすがだった。
先端部にジンとした痺れが宿り、良太は下半身をこわばらせる。
「ぐうっ、絡みついてくる……う、あうっ」
「んふ、そろそろ……イキそう、なのかな……？」
じわじわと舌による圧迫を強め、射精に向かって追いつめられる。
憧れの女性の前であっけなく放出させられてしまうのは男としての沽券に関わる。
そう思いつつも、刻々と蓄積する快楽刺激の前に、童貞の少年の欲情は決壊する寸前だった。
「濃くてしょっぱいのがまた……どんどん漏れてくるわね……んちゅ」
快感の上昇に合わせて鈴口が大きく開く。射精さながらに、とめどなくカウパーが漏れ出して千夏の口内に流れ込んだ。
ごく、ごく、と喉を鳴らし、美味しそうに嚥下しながら、千夏の上下動はさらに加

速する。
熱い口腔粘膜で擦られるたびにペニスに電流のような愉悦が走った。
踊るように跳ねた舌が亀頭や竿に絡みついては、甘美な圧迫を送りこんでくる。
「んっ、うわぁっ、そんな場所まで……！」
不意に千夏の右手が伸びてきたかと思うと、睾丸をやわやわと揉みしだいた。
そんな場所まで愛撫されるとは想像もしていなかった良太は驚きに目を見開く。
「まあ、ずっしりと重いわね。精液がいっぱい詰まってそうよ……そうとう溜まってたのね？　ふふ、全部絞り出してあげたいな？」
フェラの狭間に千夏は嬉しげな笑みを浮かべた。
指先で睾丸の表皮をなぞるようにして優しく撫で、揉む。同時に顔を上下させて、ペニスへの摩擦快感も断続的に送りこんでくる。
肉棒も、睾丸も、男性器のすべてを愛撫されて、下腹部全体が官能の炎で燃え尽くされそうだった。
「こんな……こんなにも、気持ちいいなんて……はぁぁ、あうっ」
下腹からマグマのように燃え上がった欲望のたぎりが吹き出し、精管を通って肉棒の先端へと殺到した。

あまりの肉悦に目の前が明滅する。
しょせん千夏とは性経験が違いすぎるのだ。勝ち目など最初からなかった。
「ああっ、もう駄目だぁっ」
とうとう良太は降参の声を上げると、腰を小刻みに痙攣させて達した。
熱い口腔粘膜に包まれたペニスをぶるぶると振動させて、ねっとりとした濃厚樹液を放つ。
「んぐっ、うううっ」
さすがの千夏も口内に大量の放出を受けて目を白黒とさせた。
「はむ、ううっ……す、すごい味……ねっとりと、濃くて……ふう、んっ」
粘性の高いドロドロとした大量のスペルマを、千夏はうっとりと目を細めて嚥下している。
あの千夏先輩に精液を呑ませている――。
精飲の征服感に浸りながら、良太は輸精管から噴き上がるスペルマを次から次へと放出した。
「あああっ、まだ出るっ！　よすぎるぅっ……！」
まるで止まる気配を見せない、長い長い射精だった。

千夏はそれをすべて恍惚とした様子で口いっぱいに受け止めている。
口蓋や歯茎、舌にまで飛び散った精液を舐め取りながら、一滴も余すまいと呑み干している。
「はあっ、滅茶苦茶気持ちよかった……！」
ようやく吐精が終わり、良太は満足の息を漏らしてペニスを引き抜いた。
精液と唾液でヌルヌルになった肉棒は妖しい光沢を放ちながら、なおもフル勃起の状態を保っている。
赤黒い亀頭は鎌首をもたげ、雄々しい仰角に揺れていた。
「ふふ、まだまだ元気じゃない。とりあえず精力に関しては合格点ね。二重丸を上げたいくらいよ」
内側からはち切れんばかりに膨らんだペニスを見つめ、千夏が嬉しそうに笑った。
唇の端から糸を引いてこぼれる白濁の粘液が、快活な美貌にエロチックな彩りを添えている。
「んっ、濃くて美味しいわ、良太くんの精液」
その粘液を舌で舐め取りながら薄く笑う。高校時代の爽やかな笑顔からは想像もつかないほど淫蕩な笑みだった。

良太に対して、もっと淫らな行為を期待している笑みだ。
「じゃあ、いよいよ本番ね。童貞を卒業する覚悟はいい？」
微笑みながら立ち上がった千夏が顔を寄せてくる。甘い息を吹きかけられて、全身がぞわりと粟立った。
（ずっと憧れだった千夏先輩と、俺はこれから生まれて初めてのセックスをするんだ――）
その実感が良太の胸を甘酸っぱくときめかせた。
「は、はい。俺、千夏先輩としたいですっ……ん、む」
答えたところで、千夏に唇を奪われた。
（キス、されてる――千夏先輩に！）
良太にとって生まれて初めての口づけだった。
頬に触れる熱い吐息。
眼前には目を閉じ、頬を薄桃色に染めた、可憐な千夏のキス顔がある。
高校時代にこんなシチュエーションを何十回、何百回と妄想したが、まさか現実に叶うとは思っていなかった。
良太は夢見心地で千夏の唇を味わった。ぷにぷにとした肉厚の唇の感触にうっとり

となる。
さらにぬめる舌が良太の唇を上下に割って、口内に侵入してきた。
「ん、ちゅ……むぐ、ぐぅっ」
甘ったるい唾液を注ぎこまれながら、肉厚の舌に自分の舌を搦め捕られるディープキスの感触がたまらなく心地よい。
陶酔と興奮が一体化した衝動で勃起がさらに強まった。
二十歳のペニスはどくどくと集まってくる熱い血潮でみるみる膨張し、はち切れんばかりだった。
「ねえ、触って……私のことも気持ちよくしてね」
キスの合間に千夏が囁く。
同時に、ぱさり、とわずかな衣擦れの音がした。
「触る、って……」
「もう、私だって堪らないんだからね。ほら、ここ」
じれったそうに千夏が良太の手を取る。
そのまま股間まで導かれた。
良太はドギマギしながら右手の人差し指を彼女の秘所に沿わせる。

指先にまず伝わってきたのは濃密な毛の感触。
（あれ？　なんだ、これ）
キスしたまま視線だけを下に向ける。
いつの間にか、千夏はハーフパンツも、その下のパンティも脱ぎ捨てていた。上半身にテニスウェアの上着を纏っただけの半裸姿だ。
先ほどキスの合間に聞こえた衣擦れの音はこれだったらしい。
異性の生身の性器に――それも千夏の秘所に直接指で触れている感動で、下腹部の肉勃起がビクンと跳ねた。
指先で濃密な陰毛をかき分けて進むと、指先に湿った感触がした。
（えっ、濡れてる――!?）
驚きと興奮で心臓の鼓動が高まる。
二枚のラヴィアはすでにしっとりと潤んでいたのだ。
指先で恐る恐る花びらを捲ると、その向こう側にはラヴィアよりも光沢の強いサーモンピンクの膣孔が姿を見せた。
初めて目にする生身の秘孔の妖美さに、良太は呼吸も忘れて見惚れていた。指の腹で割れ筋を上下になぞり、その感触を何度も確かめながら、ゆっくりとぬかるんだ秘

孔の内部に指を差し入れていく。
「ん、ふぁ」
千夏が唇を離し、かすかな吐息を漏らした。
内部は想像以上にぬかるんでいた。ずぶり、とわずかな抵抗感とともに、良太の指がどんどん沈んでいく。
「ふあ、あっ……そうよ、優しく……」
くちゅ、くちゅ、と肉壺をかき混ぜるたびに、指先に粘ついた襞の感触がまとわりつき、いやらしく湿った音が鳴り響く。
千夏の欲情の証ともいえる音を耳にして、良太の興奮はいやが上にも高まった。
「千夏先輩も、エッチな気持ちになったりするんだ？」
「私だって女だもの。それにね、良太くんがいやらしいことしてくるから、その気になってるのよ？」
悪戯っぽく微笑む千夏の顔は赤く上気し、言葉の端々に乱れた吐息を挟んでいる。
良太は興奮に駆られて、さらに指を差し入れる。
複雑に折り重なった肉層をかき分けながら付け根まで埋めると、襞肉が四方から押し寄せてきて、指全体を強く絞ってきた。

「生徒会では……んっ、ふあっ……あんなに純朴だったあなたが……なんて思うと、私、ちょっと興奮してきちゃった」
しなやかな両足が跳ね上がり、むっちり張った腰は左右にくねる。
生まれて初めて体感する、生々しい女の欲情――。
なおも指に力を込めてぬかるんだ内部をかき回した。指に絡みついてくる粘膜は熱感を増し、指先が溶けてしまいそうだ。
ぐちゅ、ぐちゅ、という水音が淫靡なハーモニーを奏で、欲情を煽られる。下半身が燃えるように熱くなった。
「ち、千夏先輩、俺、もうっ……！」
ハアハアと息を荒らげながら、良太は指先をヴァギナから引き抜いた。
憧れの先輩に正面から抱きつき、のしかかっていく。手マンだけでは我慢できない。これ以上は理性の限界だった。
「もう、がっついちゃ駄目よ」
大人っぽくたしなめる千夏の言葉すらも欲情を高める刺激剤だった。
良太の抱擁から逃れ、体を離す千夏。
さすがに人妻の余裕というべきか、平然とした様子で立ち上がり、格好良くポニー

テールをかき上げた。
「女の体は初めてでしょ。ほら、特別にじっくり見せてあげるわね」
ベッドの端に腰を下ろして微笑む。
「えっ、見せるって――」
乾いた声でつぶやきながらゴクリと喉を鳴らす。
期待を高める良太の眼前で、美貌の人妻はゆっくりと両足を開き始めた。
無防備に開脚した両足の付け根には、これまでネットの無修正画像などでしか見たことがなかった生身の女性器がたたずんでいる。
しかも高校時代からずっと思い続けてきた恋しい相手の秘所だ。
「ち、千夏先輩っ……！」
先ほど制止されたことも忘れて、思わず身を乗り出す。勢いに任せて押し倒そうとしたところで、千夏が彼を押しとどめた。
「ほら落ち着いて、良太くん。焦らなくてもゆっくり見ていいのよ。ちょっと恥ずかしいけどね、ふふ」
「そ、そんなこと言われたって、落ち着けるわけないですよ。これが、千夏先輩の……！」

良太は皿のように目を開いて、その場所を凝視した。
先ほどの愛撫の成果なのか、二枚の花弁はぽってりと充血している。わずかにまくれたその向こう側にはテラテラと濡れ光る膣孔が垣間見える。
（千夏先輩のアソコの中が、あんなに見えてるっ）
心臓の鼓動が爆発しそうなほど高まった。
「ナマでしてみる？　今日は危険日じゃないし、大丈夫だと思う。それに、せっかくの初体験だものね」
千夏の笑みがいっそう淫蕩になった。
「は、はい……！」
緊張しすぎて避妊のことを考える余裕すらなかった良太は、彼女の誘いに一も二もなくうなずいた。
「さあ、来て」
千夏はベッドに上がり、仰臥の姿勢を取った。
促されて良太もベッドに上がる。大きく開いた彼女の両足の間に腰を進め、張り詰めたペニスを秘孔に近づけた。
「え、えっと……」

「ふふ、焦らないで。私が合わせてあげるから、良太くんはそのままでいいよ」
余裕のある千夏の態度に、焦りかけていた良太は落ち着きを取り戻した。
たおやかな両手がカチカチに硬化したペニスを掴み、ぬかるんだ女陰の中心部へと導いた。
「ほら、ここに入れるの。分かる？」
千夏に照準を合わせてもらい、柔らかな花弁を割って亀頭が濡れた窪みにあてがわれる。
「いいわよ。さ、そのまま腰を前に進めなさい」
「は、はいっ」
いよいよだ、という期待感に胸を膨らませ、良太は大きく息を吸うと、アドバイス通りに腰を前に進めた。
ぐちゅり、とひときわ濡れた感触が亀頭に訪れる。
続いて、硬く尖った肉の切っ先が二枚のラヴィアを力強く押し開き、内部へと没入し始めた。
「う、ああ」
脳髄にまで響く挿入感に、良太は呻き声を漏らす。

初めて味わった女の体の中は、驚くほど熱く、ぬめっていた。亀頭から雁首辺りまでが沈みこみ、ざわつく粘膜に包まれている。

「くうっ、吸いこまれるっ」

膣壁自体の蠕動運動によって、良太のシンボルはさらに奥へと飲みこまれていく。

亀頭から竿の中腹、そして付け根に至るまでが、あっという間に熱い襞に包まれたかと思うと、先端部に柔らかいゴムのような感触がぶつかった。

（なんだ……これ……？）

戸惑いながらも、やがて、それが千夏の子宮口だと気づく。子宮に届くくらいに深く、千夏と繋がり合っている――。

「はあ、はあ、入ったんだ……！　千夏先輩の中に！」

良太は自分が童貞を失ったことを実感して、興奮の息を吐き出した。

「どう？　初めて女の中に入れた感想は？」

余裕たっぷりに尋ねる千夏に対し、良太のほうは答える余力すらない。快感と感激でいっぱいいっぱいだった。

つぶつぶの壁がうねりながら肉棒にまとわりついてくる。

（これが……千夏先輩の、オマ〇コの中っ……！）

ただこうして挿入しているだけで、甘く蕩ける愉悦に全身の力が抜けていく。
先ほどのフェラチオともまるで違う快感だった。単純な摩擦ではなく、熱い粘膜に吸着されながら絞られる独特の愉悦。
奥深くまで咥えこまれた肉棒の先端から根元にまで、生まれて初めて味わうその快感が送りこまれ、蓄積していく。
腰の中心部で肉悦が燃え上がった。
「ぐうっ、なんて、気持ちい……はぁぁっ、ああっ」
それは連鎖的に爆発し、射精感を一気に高める。
まずい、と思ったときには、すでに射精寸前まで高ぶっていた。
「えっ、あっ、ああっ……うあああっ、イク！」
激流のように荒れ狂う欲情の高ぶりを制御することは到底不可能だった。
深々と突き刺したまま、良太は温かな胎内に大量の樹液を放出してしまう。
「えっ……!?　やぁぁっ……」
灼熱する意識の片隅に、千夏の戸惑うような声を聞いた気がした。
が、次の瞬間、怒涛のように燃え上がる快楽にすべてを押し流される。腰の芯に蕩けるような熱が広がり、自分でも驚くほどの勢いで次から次へと憧れの女性の膣にス

ペルマを注ぎこむ。
高校時代からずっと抱いていた思いのすべてを解き放ち、千夏の狭苦しい肉壺を己の子種で満たしていく。
「ふああ……き、気持ちいいっ……ああ、まだ出るっ……！」
自慰では決して得られない圧倒的な充足に、良太は生まれて初めての多幸感に包まれ、甘い喘ぎを漏らした。
「きゃあんっ、熱いわっ！」
一方の千夏は一瞬驚いたような顔をしたものの、すぐに歓喜の表情を浮かべた。
嬉しそうに目を細め、良太の大量射精を膣いっぱいに受け止めている。
「はあっ、はあっ、き、気持ちよかった……！」
長い長い射精を終えて、良太はようやく一息をついた。
あらためて千夏に視線を向けると、憧れの人妻は余裕たっぷりの笑みを浮かべて良太を見上げている。
「ふふ、もう出しちゃったのね？」
「す、すみません、あんまり気持ちよかったから……」
千夏先輩の前でいいところを見せたかった。カッコよくイカせて、男としての雄々

しさを示したかったのに。
落胆と失望が同時に胸の内を埋める。
まさかこんなにも早く自分のほうがイッてしまうなんて、というばつの悪さを感じてしまう。
「初体験だものね。気にしないで。少しずつ慣れていけばいいんだから」
千夏が優しく微笑んだ。
不意に、高校時代のことを思いだす。
今の千夏は、良太が生徒会の仕事で失敗しても優しく指導してくれた憧れの先輩そのままの姿だった。
（俺、そんな先輩とこうしてエッチできちゃったんだよなぁ）
手の届かない高嶺の花を征服したような優越感が、良太の下腹部に新たな興奮の血流を注ぎこむ。
「えっ、また大きくなってる、嘘……!?　ああんっ」
狭苦しい膣内を内側からめりめりと押し広げながら、良太のペニスはふたたび膨張した。
二度射精しているというのに、あっという間にフルサイズにまで勃起を取り戻して

しまったのは二十歳という若さならではだ。
「千夏先輩、俺、もう一回したいっ」
何よりも高校時代からずっと憧れていた千夏との初セックスなのだ。興奮を抑えることなど不可能だった。
良太は息を弾ませて腰を揺らし出した。
先ほどは挿入直後に暴発してしまったため、本格的に膣の中でペニスを出し入れするピストン運動はこれが初めてだ。
「うっ、くううっ、気持ちいい……！」
腰を前後に振るたびに、ぬめぬめとした粘膜に肉棒の先端から付け根までを甘く摩擦される。
見下ろせば、上半身にテニスウェアの上着を纏った千夏のしなやかな肢体が息づいていた。
仰臥してもほとんど形が崩れない弾力豊かな胸の丘は、ウェアを内側からこんもりと盛り上げており、ピストンのたびにゴム鞠のように弾んで揺れる。
（触ってみたい……！）
文字通り手を伸ばせば届く距離で艶やかにバウンドする双丘に、ほとんど本能的に

両手を伸ばしていた。
やはり先ほどの見立て通り、ウェアの下はノーブラだったらしい。テニスウェアの堅い生地を通して、柔らかな感触が指先や手のひらに伝わってくる。
「ふあぁ……柔らかくて、気持ちいい……！」
良太は感動の心地で呻くと、夢中で乳房を揉んだ。
グッと力を込めると、むっちり肉の詰まった二つのバストが素晴らしい弾力で指先を押し返してくる。
「ああっ、出したばかりなのに、こんなに元気だなんて……ふあ、ああんっ」
開いた唇の隙間から真っ白な歯列とピンク色の舌が覗き、そこから吐き出される息は甘く弾んでいた。
さらに、興奮を反映して薔薇色に上気した肌が艶めかしくてゾクリとする。
俺は今、紛れもなく憧れだった千夏先輩とセックスしてるんだ――。
そんな感慨が全身を甘酸っぱく満たした。
気持ちの高ぶりのまま、良太はスラストの勢いを増す。
本能のままに腰遣いのリズムを刻み、甘く蕩けるような膣内を猛々しく勃起した器官で擦り上げた。

高速での抜き差しに蠢く粘膜が絡みついては、火照った肉棒に甘美な肉悦を注ぎこんでくる。
「ぐうっ、うおおおっ、よ、よすぎるっ……！　くはあぁっ」
まるで膣肉に愛撫されているような感触に、良太は肉食獣のような低いうなり声を何度も漏らした。
膣の入り口から奥まで続く襞肉を、肉エラで削り取るような勢いで擦りつける。
「あっ、そうよ、そこが気持ちいいの」
千夏が悩ましげな吐息を漏らした。
カモシカを思わせる引き締まった美脚を震わせ、肉づき豊かな腰を波打つようにうねらせた。
腰奥をグッと突き出すような動きとともに、膣の入り口付近の襞が、にちゃ、と粘ついた音を立てて亀頭に絡みつく。
「ぐううっ……」
快楽中枢が集中している亀頭を責められ、良太は快楽の呻きを漏らした。
さらに二度、三度と、千夏は腰を突き上げるような動きで亀頭に膣壁を擦りつけてくる。

おそらく、その辺りに気持ちの良いポイントがあるのだろう。
良太のほうも腰遣いを調整して、膣の浅瀬を擦ればいいのだろうか。
「と、止まらないっ、くあああっ」
だが、深く突き刺したときの気持ちよさには抗いがたかった。
出し入れの深度や角度を調節する余裕など微塵もなく、それどころか燃え盛る快感に突き動かされて、良太はさらに腰遣いを加速させる。腰全体をぶつけるようにして、ガツガツと深刺しを繰り返してしまう。
「あんっ、深い――」
千夏は細い眉根を険しく寄せて喘いだ。
瑞々しい秘孔の鮮烈な締まり具合に、亀頭と膣底が勢いよくぶつかり合う刺激がミックスされ、肉棒を甘痒い快感に浸す。まるで下半身が溶け落ちてしまいそうなほど気持ちがいい。
「ううっ、すごくいいよ、千夏せんぱ……くああっ」
二度射精したにもかかわらず、三度目の射精感が高まっていく。
波打つ粘膜にペニスを搦め捕られ、絞られ、腰の芯から脳髄にまで快楽の電流が突き抜ける。

「ま、待って、もうちょっとで、私もイキそ、ああっ」
「駄目だ、イクよっ……！」
良太は耐えきれずにガツンと奥まで差しこみ、そこで小刻みな律動を繰り返した。
脳髄が真っ赤に灼熱するような快美感とともに、腰全体が官能の炎で燃え上がる。
煮えたぎるスペルマが輸精管を走り抜け、ペニスの先端から爆発するような勢いで迸った。
膣内射精の圧倒的な解放感で頭の中が真っ白になる。
滑る膣洞に奥深くまで咥えこまれた肉棒は力強い脈動を繰り返しながら、おびただしい量のザーメンを憧れの千夏の胎内いっぱいにまき散らした。
「ああ、良太くんの……いっぱい出てるっ……あうんっ、熱いわ……！」
熱湯のような射精の直撃を受けて、千夏は軽く眉間を寄せて呻いた。
軽くアクメに達したのか、膣内が今まで以上に波打つ。
激しい蠕動運動によって、最後の一滴まで搾り取ろうとさらに男根を絞ってきた。
「うわっ、また締まる！　くううっ、先輩のオマ〇コ、よすぎるぅっ……！」
なおも続く射精に至福の肉悦を味わいながら、良太は腰を震わせた。

（先輩とこんな関係になれたなんて……夢みたいだ）
良太は心地よい射精の余韻に浸りながら、夢見心地で甘いため息をついた。
永遠に手に入らない高嶺の花だと思っていた女性が、今自分の傍にいる。これからもサークルやそれ以外の場所でも会うことができる。
そして今日のように心と体を重ね合って――。
ずっとくすぶっていた恋心が一気に燃え上がるのを自覚する。
「ふふ、初めてにしてはよかったよ、良太くん。私も軽くイッちゃった」
ふと気づくと、千夏がこちらを見て微笑んでいた。
「俺もすごくよかったです……先輩とこんな関係になれるなんて」
良太は熱情を込めて、告げる。
千夏は小さくうなずくと、悪戯っぽく微笑んだ。
「あ、言っておくけど、こういうことするのは今日だけだからね」
一瞬、相手の言葉の意味が分からなかった。
思考が麻痺してしまう。
（えっ、今なんて言った？　千夏先輩、これが今日だけって……？）

「私たちの関係は一夜限りのアバンチュールだから」
釘を刺すように、もう一度告げる千夏。それに対し、良太のほうは呆然として返事をする余裕もなかった。
「ごめんね。サークルのルールでそうなってるの」
「サークル？　えっ、どういうことですか？」
「私と他に二人のメンバーで、サークル内にもう一つ別のサークルを作っているのよ。全員人妻で『結婚しても女であり続けたい』って強く望む人ばかり。私も含めてね」
「それって、もしかして――」
「ええ。『婚外のときめきを求めること』がサークルの活動内容なの。だけどそれにはいくつかルールがあってね。例えば――一度関係を持った相手とはそれっきりで終わらせて、二度以上関係を持つことを禁じる、とかね。不倫に嵌まって家庭を崩壊させないための自主規制ってところかな」
千夏の言葉を頭の中で整理するのに数瞬の時間を要した。
頭の中がまだ混乱している。
だが、千夏の言っているのは、結局はこういうことだろう。
つまり、

「俺とこういうことしたのもサークル活動ってこと……？」
良太は呆気にとられて千夏を見つめた。
数年越しの恋心が報われたと舞い上がっていたのは自分だけで、千夏はもっと軽い気持ちだったのだろうか。
「あ、言っておくけど、誰でもいいってわけじゃないから」
千夏が真剣な表情に戻った。
「良太くんのことをいいな、って思ったからこういうことしたんだよ？　生徒会で一緒だったときから、ちょっと意識してたから……」
ドクン、と胸が甘く疼く。
では、自分だけではなかったのだ。生徒会で一緒に働いていたときに、千夏のほうも良太のことを――。
「でも、私はやっぱり人妻だから。これ以上は踏み込めないの。ごめんね」
「先輩……」
「代わりといってはなんだけど、あなたを他のメンバーに紹介したいの。いいかな？」
千夏が悪戯っぽく微笑む。
「え、ええ……」

返事をしたものの、半ば心ここにあらずという感じだった。
千夏と結ばれた喜びと、それが一回限りの儚い夢だったというショックと。
二つの気持ちが胸の中でせめぎ合い、心を揺さぶる。
「ありがと。じゃあ、今度の練習で引きあわせるね。大学時代の三つ上の先輩で、今は社長夫人をしているんだけど――」
千夏の説明は、もはや上の空の良太の耳を素通りしていくだけだった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/